

放課後児童支援員として子どもたちの宿題とどう向き合うか

－ワークショップから見えてくる理想と現実－

専攻 人間発達教育
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M18001J
氏名 碓井大将

第1章 問題の所在と目的

筆者は放課後児童クラブで放課後児童支援員の資格を有した指導員として日々、子どもたちの生活に関わっている。その関わりの中で宿題の時間が子どもたちの放課後の時間の負担になっている事実を目の当たりにしている。先行研究からも、宿題が子どもの負担であることが示されている(杉村ら.1992)。また、それと関わる家庭の負担であること(竹田ら.2013)、宿題を提示する教員の負担であることが示されている(阿久津.2017)。宿題と関わる者の多くが負担を抱えている中で、指導員も宿題に関わる者として子どもの宿題に負担を感じている。

筆者が働くA児童クラブの場合も同じ問題を抱えている。加えて、指導員同士の関わり合いが少ない勤務体制のため、連係不足によって宿題に関する問題がさらに増幅していた。

筆者としては、A児童クラブがより充実した支援をするために、指導員同士が子どもたちの宿題とどう向き合うかについて話し合うことが重要であると考えた。

そこで本研究では、A児童クラブにおいて、指導員たちが指導員という立場として子どもたちの宿題とどう向き合うのかについて話し合う場を設けることとした。そこで、ワークショップによる場づくりを行う。ワークショップは、自由な学びができる場であり、「まなびほぐし」の場である(佐伯.2012)。また、協同の関

係性を築き、お互いが安心して真実を話し聴きあえる場でもある(中原.2001)。A児童クラブの支援員にとってはこの場への参加自体大きな価値を持つと考えられる。その場で宿題について検討していくことで、子ども、学校、家庭、という宿題と関わり負担を抱えている者の第四の当事者である放課後児童支援員が宿題の負担を減らす仲介役としての存在意義を示すことができると考えられる。また、協働の関係性を築き、お互いが真実を話し聴きあえる場として、また自由に「まなびほぐし」ができる場としてもワークショップが有効であると考えた。

また、本研究ではワークショップを2回行う。1回目のワークショップでは、指導員としての向き合い方の自己理解や他者理解をしていく。2回目のワークショップでは、指導員として理想と現実を語り合うことで今後の向き合い方につなげていく。

第2章 第1回ワークショップ実践について

第1回ワークショップは、中原(2012)のセンスメイキング・ワークショップとして行い、放課後児童支援員が子どもたちの宿題とどう向き合うかという対話によって向き合い方の自己理解や他者理解をしていくことを主な目的として行った。参加者はA児童クラブの経営者であるこじみ(仮)、放課後児童支援員のいくこ(仮)、まなこ(仮)、ファシリテーターは筆者であった。

そこでは、参加者は「やりたくないけど、やりたくなる宿題」をテーマに話題を展開していった。展開された話題は、宿題案の福笑い方式であり、そこから展開される宿題観の話題において大きな盛り上がりが見られた。

これらの話題は、経営者であるこじみ(仮)を中心に展開された。こじみは話す側として自身の宿題観を見つめ直していった。そして他の参加者は聴く側としてこじみの宿題観を共有していった。全体的に見ると、参加者は他者理解、自己理解を通して学びはあっても「まなびほぐし」がされたとは言えなかった。ワークショップのデザイン、ファシリテーターの在り方、テーマ設定に関して課題を残す結果となった。

そこで、第2回については、放課後児童支援員の理想と現実をより引き出しやすい場づくりをワークショップで行っていく。

第3章 第2回ワークショップ実践について

第2回ワークショップは、中原(2012)のリフレクティブ・ワークショップとして行い、放課後児童支援員が自己の宿題との向き合い方をリフレクションし、宿題との向き合い方の理想と現実を語り合うことで今後の向き合い方につなげていくことを主な目的として行った。参加者はこじみ(仮)を除いた、いくこ(仮)、まなこ(仮)、ファシリテーターは筆者であった。

そこでは、参加者から放課後児童支援員としての取り組み方や自身のもつ課題、A児童クラブの現状について話題が展開された。展開された話題から参加者は、宿題に対する取り組みや理想などの自己の宿題観を振り返り、他の参加者の考えを共有し、自身の今後の宿題との向き合い方やA児童クラブの課題について考えていった。しかし、第1回ワークショップとは違い、第2回ワークショップは現状を振り返るに

とどまり、参加者にとって新たな学びがあったとは言えなかった。

第4章 総合考察

2回にわたるワークショップを通して、まずワークショップにおける場づくりがどうあるべきなのかについて考えることができた。

ワークショップは、自由な学びができる場であり、「まなびほぐし」の場であるが、協働の関係性を築き、お互いが安心して真実を話し聴きあえる場であることが前提条件となると考えられる。また、ワークショップの場において参加者がそれぞれ役割分担をしていることも見て取れた。それを踏まえたうえでワークショップをデザインしていくことが重要であると考えられる。

放課後児童支援員については、2回のワークショップを通して、理想と現実についての話題が展開される中で、A児童クラブの指導員たちは特に連携しなくても何とかなっている現状に満足していると考えられた。他の放課後児童クラブの指導員に関しても、少なからず同じ状況にあるのではないかと考えられる。

放課後児童クラブは子ども、保護者、国などから期待をされている一方で、その期待と向き合う以前に指導員として、現実問題と向き合っていく必要があるだろう。それは宿題に限らず、放課後児童クラブで子どもたちの成長を見守る立場として、指導員としての自覚をもつことが重要であると考えられる。そうすることで放課後児童支援クラブ、放課後児童支援員が子ども、家庭、学校の仲介役としての存在意義を示すことにつながってくるのではないだろうか。

主任指導教員 中間玲子

指導教員 中間玲子